


博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員(主査) 早津恵美子 

本論文は、現代日本語のAspectについて論じたもので、形態論的なカテゴリーとしてのAspect論を精密にするとともに、文論的なカテゴリーとして Aspectuality (文のレベルにおいて実現されるAspect的な意味とその表現手段との体系) という概念を導入することにより、Aspect、Perfect、アクチオンズアルトなどを体系的に捉えている。現代日本語の文法研究においてAspectはかなり研究の進んだ分野であり多くの重要な成果が蓄積されてきてはいる。しかし、理論的な問題についての議論や体系性の追究、動詞全体のAspect性などについての研究はまだ十分とはいえない。本論文は こういった問題に対して明確な立場と方法論をもってとりくみ、理論的にも記述的にも大きな成果をあげている。Aspect研究を新たな段階に引きあげ、今後の研究の発展に重要な意義をもつ研究だと判断される。

以下にこの論文の構成と概要、審査過程での評価を述べたうえで、最終結果を報告する。

《論文の構成》

まえがき	
第一章	Aspect
第一節	Aspectに関する基礎的な概念
第二節	Aspect的な意味の体系性について
第三節	Aspectの転移的な用法
まとめ	
第二章	Perfect
第一節	「している」の形の表すPerfect
第二節	Perfectの体系について
まとめ	
第三章	Aspectuality
第一節	Aspectualityに関する先行研究
第二節	Aspectualityの体系
第三節	時間的な具体・抽象性
まとめ	
第四章	語彙・文法的な系列
第一節	動詞の語彙・文法的な系列に関する先行研究
第二節	限界性
第三節	一次的なアクチオンズアルト
第四節	二次的なアクチオンズアルト
第五節	段階性
まとめ	
おわりに	

《各章の概要》

「まえがき」では、日本におけるAspect研究の流れが、代表的ないくつかの立場をとりあげ それぞれの研究の成果や問題点を明らかにしつつ適切に紹介され、それらを批判的に受け継ぎつつ研究をすすめるようとする自身の問題意識や立場が鮮明に述べられる。第一は、Aspect研究が 形態論的なカテゴリーとしての研究から構文論的・テキスト論的

なアプローチに進んできている現代の段階において、そういった発展をふまえた上で、あらためてアスペクトの形態論を検討し、これまでの理論の修整をめざそうという点であり、第二は、単語の文法的な意味や機能はその語彙的な意味によって大きく規定されるものだという立場にもとづき、アスペクト的な意味の土台をなしている動詞の語彙的な意味を、動詞の全体にわたって(従来は限られた動詞についてしか検討されてこなかった)、分析しようとする点である。

「第一章 アスペクト」では、まず、本論文の議論に大きな影響を与えた先行研究が詳しく検討され、それをうけて、日本語のアスペクトを、完成相(「する」「した」)と継続相(「している」「していた」)、という二つの形態論的な形をもつ形態論的なカテゴリーとして位置づける。そして、アスペクトの意味として、「一般的な意味」と「個別的な意味」とを区別する。一般的な意味という概念を日本語のアスペクト論にとり入れ、そのコンテクス的な変種として個別的な意味をとらえたことは本論文の特徴であり、従来の研究を一步すすめている。個別的な意味はさらに、そのカテゴリーを代表する意味としての「中核的な意味」とコンテクストにしばられないもっとも自由な意味としての「基本的な意味」とに分けられる。継続相はいずれにおいても“過程継続”という意味(「お風呂がわいている」「大根を煮ている」)を表すが、完成相は、中核的な意味としては“限界到達”(「ほら見てごらん、卵を産むぞ」「あっ、ランナーが走った」)を、基本的な意味としては“全体的な事実の意味”(「あすも会社に行きます」「夕べは一人でご飯を食べた」)を表すとする。従来の研究では完成相の意味は“ひとまとまり性”とのみとらえられていたが、それをこのように二つに分けることでこれまで説明のできなかつた用法をもうまくとらえることができるようになったことは本論文の重要な特徴である。(他に、反復的な動作を表すときの意味として「周辺的な意味」もとりだされている。)

次に、完成相と継続相の中核的な意味と基本的な意味が、会話文だけでなく小説の地の文においても貫かれていることを具体的な例によって明らかにする。このことによって、従来無理な解釈をせざるを得なかつた現象がうまく説明されている。

「第二章 パーフェクト」では、先行研究を紹介し問題点を指摘したうえで、パーフェクトを、“動作の内的な時間構造にかかわらない形での、基準時点以前への、動作の位置づけ”ととらえる。そして、動作の時間的な位置づけである点で共通する三つのカテゴリー、パーフェクト・アスペクト・テンスの関係を次のように捉えている。すなわち、テンスとパーフェクト・アスペクトとは、ダイクシス的な時間的位置づけであるか非ダイクシス的な時間的位置づけであるかで対立し、パーフェクトとアスペクトとは、同時的な位置づけであるか非同時的(以前)な位置づけであるかで対立するという。

次に、パーフェクト的な意味を表わす諸手段として、「している」「してある」「したことがある」「しておく」「した」などがあるとし用例とともに種々な意味を示している。このうち「している」については、“先行性”(「映画を見る前に原作を讀んでいた」)と“事実性”(「宿帳を見ると確かにその日も泊まっている」)というふたつのパーフェクト的な意味をとりだし、前者は他の動作との時間的な関係を、後者は非時間的な関係(論理的関係など)をあらわすことを明らかにする。なお、これまでパーフェクト的な意味だとされることがあった“変化の結果の状態”(「お湯がわいている」)は、本論文では、アスペクト的な意味だとされ、それによってパーフェクトの概念がより明確になっている。

「第三章 アスペクチュアリティ」では、文論的なカテゴリーとしての「アスペクチュ

アリティ」という概念を、「文における、アスペク的な意味と、その表現手段との体系」と規定する。これは従来もみられるこの概念を 批判的・発展的にうけついだものである。そして、アスペクチュアリティの文法的な形式の側面として「アスペクト」と「パーフェクト」をみとめ、対象的な内容の側面として、動詞内的な手段によるもの（「限界性」「アクトオンスアルト」「段階性」と動詞外的な手段によるもの（「回数性」「持続性」と）があるとして、全体を体系的にとらえており、本論文の独自性のひとつとなっている。

次に、アスペクチュアリティに関わる意味的なカテゴリーである「時間的な具体・抽象性」について検討している。動作(出来事)のなかに、時間的な具体性のある動作（「犬が走る」「ドアをたたく」と時間的な具体性のない動作（「太郎は毎日聖書を読んでいる」「太郎はむずかしい本を読む」「人は本を読む」とをみとめ、さらに下位類を区別して、それぞれについて、完成相と継続相とのアスペク的な対立の有無、テンス的な意味（過去・現在・未来）を表しうるか否か、動作の主体が具体的かどうか、といった点を検討し、時間的に具体的な動作ほどテンス的な意味とアスペク的な意味の対立がつよく、時間的な具体性を失うほどその対立が弱くなり、極度に抽象的になるとテンス的な意味もアスペク的な意味も失うことを確認している。

「第四章 語彙・文法的な系列」では、まず、アスペク的な観点からの動詞分類として知られている「継続動詞・瞬間動詞」あるいは「動作動詞・変化動詞」といった分類を批判し、それにかわるものとして「限界動詞・無限界動詞」という分類を、先行研究にも学びつつ、はっきりと規定し提案する。これまでの分類において観点として注目していた語彙的な意味が、アスペク的な性質にかかわる一般的な意味特徴でなかったことを指摘し、「限界性」という特徴に注目して分類したものである。

つづいて、これまでのアスペクト研究ではあまりとりあげられてこなかった“活動”をあらわす動詞（「あそぶ、経営する」）や“特性・関係”などを表す動詞（「とがっている、もとづく」）、さらには「非展開動詞（シテイル形で動作の継続も変化の結果もあらわさない動詞：射殺する、指摘する）」を和語動詞・漢語動詞のなかから非常に多くの例を見つけ出し、アスペク的な性格を観察している。さらに、動作の実現の仕方や様態を表わす複合動詞（「のぼりきる、走りとおす」）、段階性を表す複合動詞（「読み始める、読みつづける」）についてもふれている。この章の議論は、従来のアスペクト研究ではごく限られた動詞をとりあげて論じられていたことを批判し、「すべての」動詞をアスペクト研究の対象にしようとする有意義で意欲的な試みである。

「おわりに」では、本論文の アスペクト研究史の中での位置づけがきわめて明晰に示され、また、ロシアのアスペクト研究との関係や日本語研究にとりいれるときの限界、それに対する須田氏の立場がはっきりと述べられている。また、本研究で扱えなかった課題や今後の展望も示されている。

《本論文にたいする評価》

○本論文は、現代日本語のアスペクトの問題を包括的にとらえ、理論的かつ体系的なアスペクト論を展開している。また、文法的な意味・機能と語彙的な意味との相互関係を重要なものととらえ、アスペクチュアリティという概念によって、文法的な形式の側面としてのアスペクト・パーフェクトと、対象的な内容の側面としての語彙・文法的な系列とを総合し包括的・体系的にとらえることによりかなりの程度成功している。本論文で展開され

たアスペクト論は、今後の日本語のアスペクト研究において、大きな貢献をなすものと思われる。

- 論文の構成がたいへんしっかりとしており、論旨もきわめて明快で説得力がある。大きなテーマを扱ったものであるが各章に有機的なつながりがあり、アスペクト論としての統一性がある。また、各章ごとに、最初にその章の位置づけや問題意識が示され、最後にその章のまとめがきわめて手際よく述べられているが、その説明からは、須田氏がそれぞれの問題の意義や論文全体の中での各章の位置づけを正確に捉えていることがうかがえる。
- 日本およびロシア(ソ連)でのアスペクトの研究に対して、大きな流れについても個々の研究についても、理解およびそれに対する批判がたいへん適切である。他者の研究に対する自身の研究の姿勢が意識的にとらえられており、また、研究史の中での位置づけが明瞭に自覚されている。それらが述べられている「はじめに」と「おわりに」は、ある審査委員から圧巻であると評価された。
- アスペクト的な意味についての従来の研究では、「している」形の意味のみが対象とされることがほとんどであり、かつ その種々な意味の列挙、あるいは基本的な意味と派生的な意味の区別という程度に終わっていることが多い。それに対して本論文は、「する」「している」それぞれの形式が表すアスペクト的な意味の全体を綿密に検討し、その体系性を理論的に追究することによって、形態論的なカテゴリーとしてのアスペクトの性質を一層明らかにすることに成功している。
- これまでのアスペクト研究では、きわめて限られた類の動詞(「する」と「している」の対立をもつ和語の単純動詞)しか考察の対象にされてこなかったが、本論文の第四章では、語彙的な意味、語種、語構成などの面で様々なタイプの動詞をひろくとりあげ、いくつかの類型をみいだしている。今後のアスペクト研究の大きな柱となるものと思われる。
- ただ、この第四章でなされている分類の中には、階層的な連関がとらえきれていないと思われる点があるのが惜まれる。また、この章の最後に簡単に述べられている「段階性」については、第四章から独立させあらたな章をたてて大きなテーマとして分析を深めてはどうかという意見もあった。
- 考察の対象とする「日本語」の範囲について論文のはじめに述べられており、現代日本語(標準語)に限るとされている。そのこと自体は、本論文の価値をそこなうものでは全くないが、今後、方言も含め、さまざまな位相のアスペクトを扱うことにより、より豊かなアスペクト論が構築できるのではないかという指摘があった。

《総合的な判断》

以上述べたように、本論文は 現代日本語のアスペクトの問題を包括的に扱い、従来の研究を正しく理解したうえで それに批判的な検討を加え、アスペクト論を新たな段階に引き上げる論説を説得的に展開しており、高い評価を与え得るものである。今後の課題として残された点はあるものの、最終試験において、それについての自覚と力が十分にうかがえた。この研究をもとに今後の飛躍が大いに期待できる。学位請求論文の内容および最終試験における応答内容から総合的に判断した結果、審査委員全員一致で、この研究が博士(学術)の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。